

座談会

参院選の総括と今後の展望

辻元 清美 (民進党衆議院議員)

山口 二郎 (法政大学教授)

柿崎 明二 (共同通信編集委員)

中北 浩爾 (一橋大学教授) 司会

中北 本日はお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。

今日のテーマは、参院選を受けてその評価と今後ということで、とりわけ民進党を中心とする野党勢力を軸に据えて座談会を行いたいと思います。辻元先生には民進党内部の動き等について。山口先生には、今回は市民連合を立ち上げられて選挙戦では野党をバックアップされましたので、そうした話を軸に。柿崎さんには、メディアの立場からちょっと引いた形で、やや違った視角からお話しいただければと思います。

柱立てですが、まず全体の総括についてお話しいただいた上で、一つ目の柱として、野党共闘の成果と限界、今後どうするかに関して議論したいと思います。もう一つの柱は、政策について。特に民進党の選挙公約をどう評価するのか、その打ち出し方、憲法改正に対する態度などを考えます。以上の二つの柱を受けて、最後に代表選に向けて今後どうしていくのか、安倍政権にどう対抗していくのか、ということを進めていきたいと思っています。

はじめに、参院選の全体の総括ということで、これについては、敗北か復調かいろいろな見方があると思いますが、まず辻元先生、次に山口先生、最後に柿崎さんという順番でお願いしたいと思います。

参院選の総括

辻元 今回の参議院選挙は復調の中の敗北だと思います。当事者の私たちからみれば、よくとどまることができたかなという気持ちと、あと愛媛をとって比例が3~4、まあ2~3でも取れば復調と強く言えるところだったのですが、やはり比例が伸び悩んだのが一番厳しかったと思います。

6年前と比較することはあまり意味がないと思っていて、3年前が17議席だったので、倍近くいっているということは良かった。一人区に12の接戦区があったのですが、ここが11勝1敗という結果になったことは、野党協力の効果があったのではないのでしょうか。

選挙中は、この接戦区12をめぐって本当に激しい戦いだったのです。最終日の3日前かな、東京駅に行ったらものすごくたくさんSPがいて、誰が来るんだろうと思ったら安倍総理が来た。車両は違っていたけれども同じ新幹線に乗って、二人とも郡山で降りて、それぞれ違う車に乗るのだけれど、すごく近いスーパーの前で互いに演説をしました。

演説が終わって聴衆に握手をしに行ったら、「いま安倍さんのも聞いてこっちに来た」と言われました。それくらい近いところでつばぜり合いだった。福

島の候補者は現職の大臣でしたから。その前日に青森に行ったら小泉進次郎議員が来ていて、長野へ行けば安倍昭恵さんが来ていた。接戦区はそういうすさまじいバトルだったわけです。

安倍総理、小泉進次郎議員、安倍昭恵さん、この3人に代表される人たちが、1回ではなく2回、3回入った選挙区のほとんどを与党は落としたのです。だから、私が安倍総理だったら勝ったとは思えないほど後味の悪い選挙だったのではないかと思います。接戦区で11勝できたからといって浮かれているわけではないのだけれど、それは一定評価できると思っています。

山口 私はやはり、負けたという感じですね。自民党、公明党を見て、今回はともかく、今年の安保法制反対運動以来、自民党に対する批判票をどれだけ集められるかという勝負だと思っていました。まず全体で比例の自民党の票が2000万を超えましたね。これでもどうしようもないと思いました。我々は徹底的に安倍政権を批判して、安保法制のみならず政権あるいは経済政策の失敗、様々な言動の問題、リーダーとしての不安定性や幼稚さ、いろいろなことを批判して、安倍じゃ困るだろうというキャンペーンを展開したのですが、それが全体としてみればほとんど国民には通じなかったという総括です。だから私は今回負けたと思う。その結果として改憲勢力に3分の2を許した。やはり目標を達成できなかったという感じですね。

民進党だけを見ていれば、3年前が悪すぎたからそれに比べればちょっとはましかという数字ではあるのですが、復調というほどのこともないと思います。やはり政権を失ってもう4年になろうとしているけれど、まだ民主党政権の負の記憶があって、与党側はそれをいつも利用しながら、自民党に票をつなぎとめる戦術をとっているわけで、それがまだ通用しているという現実があるわけです。

全体としてみれば、我々がこれだけ1年かけて、憲法の危機、あるいは平和国家の危機みたいなことを言ってきて、一時的には内閣支持率と不支持率を逆転させるということもできたのだけれど、それを参議院選挙につなぐことができなかったというこ

とで、やはり日ごろ悲観的な私としては、今回は負けたなという総括です。

柿崎 私は、今回は前と比べるとは無理だと思います。つまり共産党と表立って組んだのははじめてで、今回はある意味実験だと考えるべきです。そういう意味ではある程度想定通りの結果は出たけれど、ここから先たとえば与党がすごく悪ければどこまで伸ばせるのか。共産党と組んで政権をひっくり返せるのかということ、それは無理なのではないかという結論が出たと思います。

というのは、前までは保守無党派層、つまり何かがあれば民主に来るけれども自民党にも行くという保守の無党派層の取り合い、ゼロサムだった。つまり5票とれば、10票の差がついていましたが、今回はその分を自民党にあげる形になってしまったので、たぶん自民が200万票伸ばして2000万に乗ったのだと思います。では民共連合はどこで票を伸ばしているかということ、レフトの方でとった。いままでのようなゼロサムの戦い方から非ゼロサムになったので、政権を取るとなるときつい戦いだ。

非ゼロサムの戦いでは、共産党と組んで伸びますが、限界がある。朝日新聞が7月12日の紙面で、共闘達成率というのを出している。比例の票より個人の票をどれだけ伸ばしたか。山形が一番で177%。執行部の考え方でいえば、それが高ければ高いほど勝っているはずなのですが、そうでもない。高い方が負けているのです。何が起きているか。東北、甲信越で勝ったところは、たぶんゼロサムがある程度残った。なぜかということTPPで保守無党派層や自民党票が来たのです。前までの戦いが若干残ったところは勝っていた。

ただ、では共産党と組むのが何がなんでもダメだということではなくて、小沢さんがよくオリーブの木を言いましたが、イタリアの場合は共産党が左翼民主党になってのオリーブの木。日本で起きているのは共産党はそのまま野党第一党が変わっている。その倒錯を解消できればこのやり方でもさらに伸ばせるかもしれません。かつて民主党は「共産党とは組まない」といったのです。民主集中制という指導原理をもっているところとは組まない。後継



辻元 清美 氏

政党であればもう一度その話をやり直して、きつくても表で自らを批判にさらす。その結果共産党がやはり無理ですというのであればそれはそれで出直しだし、共産党がもしも変わる、変わらなくてももっと深い政策協定ができるのであれば、それをやった方が良く思うのです。今のままでは、すぐに限界が来る行き止まりの道を歩んでいるようにしか見えません。

民進党結成の経過

中北 ありがとうございます。野党共闘の話になってきていますが、共産党との関係に行く前に、外部からみて民進党の結成過程が一番よくわからないところでした。知らない間に、難しいのではないかと言われていた維新の党との合流が決まって、党名等いろいろありましたが、3月27日に民進党が結成された。これは当然参院選をにらんだということはあると思うのですが、この間の経過について辻元先生から振り返ってご説明いただけませんか。

辻元 私は、「民主党を残せ、政権まで担った党名まで含め、負の遺産まで背負って自力をつけないとダメだ」と最後まで執行部の中で主張していた一人です。枝野幹事長もそうでした。次の参議院の改選議員を中心に、民主党という名前では闘えないという大きな党内的な風圧がある一方、全国幹事長会議を開くと民主党を残せという声が多かった。それから連合をはじめ比例区の人たちは民主党を残せ

という意見が多いなど、議論が続いてきたのです。最後は岡田さんと松野さん、両方とも抜き差しならないところまで来てしまって、強引に突っ走っていったような気がします。

中北 岡田さんは維新と合流したかったのですか。

辻元 岡田さん自身は、最初は維新を取り込みたかったのだと思うのです。数を増やすということで。ところが、最後は松野さんに、「ここでやらないなら私たちは、生活、社民、共産を含めて民主党抜き共闘体制を組みますよ」とか言われて、困ったとなった。最後まで彼は名前は民主党のままでなんとなかならないかと思っていたのだけれど、結局選択肢をなくして行って合流したというふうに私は思っています。

だから、今でも私自身は民主の名前でやりたかったと思うし、ならば党首も変え、ピカピカの新しい政治勢力にしないとむしろ票が減るのではないですかということも岡田さんにも言った。あなたが辞めることになるかもしれませんと言ったのだけれど、中途半端な形になり、比例が伸びなかったのはそれも原因しているのではないかと、実はちょっと思っているわけです。

中北 結局、消極的な選択だったということですね。つまり、民主単独で戦って勝てる見通しが無い。かといって、全く新しい政党に刷新するエネルギーがあるわけでもない。消極的に合流をしたという結果だったということですか。

辻元 民主党単独で闘うすべをずっと探していたわけです。だから、自虐ポスターと言われたけれども、「民主党は嫌いでも、野党を強くするために野党第一党の民主党を一定の数にしてくれ、与野党伯仲の国会を取り戻すために。今あまりにも偏りすぎているから、私たちはもう一度そこで踏ん張って頑張りたいから」というのが1月に開かれた党大会での党執行部の多数のスタンスだったわけです。

けれども民進党結成の流れになり、一応新しいものを生み出したけれども新鮮さに欠く、そういう形の提示しかできなかった。

柿崎 私も、まったくその通りだと思いますね。

その前段階、なぜ追い込まれたかという、やはり海江田さんが何もしなかった。総括したけれどもそこまで。総括をしてさらにそれを具体化する作業、連合との関係もそうですが、政権運営のやり方とか党内統治のあり方等やっていけば、もしかすると海江田さんのままでもよかった。岡田さんもそれをやらなかったものだから、その面では第二の海江田さんになってしまった。

つまり、その時点でサーブ権をほかにとられ、振り回された。イギリス労働党は野党時代に離党者等が出ましたよね。そしたら良くなった。まとめるということは大事なのですが、バラバラだったものがダメだったのだからそのバラバラを整理する。まとめるということも一つだけれど、異質なものが出ていくのは仕方がないというところがあって、はじめて主体性が構築されて、維新よりも一段、二段上に立って物事が進められるけれど、それがなかったから、一番大きいのに維新と同じ土俵で交渉が始まってしまった。

こうなってしまうと、弱者の脅迫みたいな感じで、小さい方が強くなってしまいます。要求をのまないとこの話はなしにしようというような。

あともう一つ、名前を変えるということは私はいやだった。民主党を見ているとすぐく年代が近い人も多いので、こんなことがあってはならないけれど愛着があったのですが、あれをやったことで嫌悪感が生じた。今、たぶんあまり批判は党本部に来ないと思いますが、私の同級生でいろいろな企業の役員等やっている人たちが、だいたい選挙の前になると民主党どうなのと言ってきたのが、まったく来なくなりました。私の方から言っても、興味ないからというわけです。要はもはや嫌われてさえない。無関心。これは「好き」には換わりません。自民党は思いっきり嫌われるけれども思いっきり好かれるに転換するでしょう。だから今民進党は最大の危機だと思います。

辻元 維新と合流したことのプラスはもちろんあります。フラットに政策論を交わす文化などは維新のメンバーの方が強くもっていて、会議の空気も変わりました。ただ選挙に関しては、名前を変えたことが



山口 二郎氏

マイナスに働いたと今でも思っています。私は二つのことを岡田さんに言いました。一つは、社会党が社民党に名前を変えた直後の選挙のこと。元社会党の人たちに「社民党で新しく立候補した辻元です」と私が言ったら、社民党なんか知らんわ、なんや勝手に名前を変えてと相手にされなかったんです。そうではない人に、社民党、社民党と言っても、それが昔の社会党とくっつかないものだから、社民党って何？ と。土井たか子さんのところだということ、土井さんは社会党ではないかと。両方から相手にされなかった経験からいって、党名変更は安易にしないほうが良い。

もう一つは、国土交通副大臣時代にJALの再生を手がけたときのことです。この時に、JALは名前を変えて出直すかという話があった。でもむしろ稲盛さんと、あの鶴のマークに戻して元の原点に戻ろうとなりました。あのジャンボの重大事故でロゴマークを変えたわけですが、その負の遺産も背負って出直すしかないのだということで、原点に戻したわけです。だからやはりこういう時は、民主党の原点、「市民が主役の民主党」に戻ってやり直すしかないのではないか、と岡田さんには言ったのです。私や福山さんは、振り切って出ていくものは仕方がない。小さい核をつくって、ここからもう一度やり直して、政権交代までたどり着けるかどうかをすすしかないのだと腹を決めていたのです。

でも、途中からは、維新との合流で野党第一党の数を増やして、一方で野党共闘を実現する、この両輪で進むしかないんだと考えを切りかえました。こち



柿崎 明二氏

らで民進党をやりつつ、野党共闘は山口さんたちと月に2、3回会って、どうするかとやっていた。それで1月末くらいに私は松野さんにどういうつもりなのだと聞きに行ったら、彼は社民、生活、共産も入れて僕たちはやるからと言う。私がそれを枝野さんに伝えて、「ああそれで岡田さんは決断を迫られているんだ」と私たちにも分かったわけです。それで急いで2月19日に安保法制の廃止法案を出し、枝野さんや私が岡田さんを説得して先に野党の党首会談をやりました。そのあと合流していくのだけれども、こちらを先に押さえておこうというばたばただったわけです。

中北 なるほど、二つが同時に動いて非常に複雑な形で関連していたのですね。

辻元 そういふドタバタ劇できたこと全部を総括して、どうしていくか。私は、岡田さんが苦悩しながらやっていたのを側で見ていたけれども、やはり交渉役となるには当事者に過ぎたのではないかと、窓口は誰かが担うべきだったのではないかと思います。

民主党以来の自己改革

中北 先ほど柿崎さんがおっしゃられた、民主党以来の自己改革。つまり政権から転落した後いろいろなことがやられてきたと思うのですが、なかなか見える形になっていかない。なぜだったのでしょうか。これが問題の根源にあると私は思っているのですが。

辻元 自己改革はすごく難しくて目に見えない。でも、自民党が長年与党をやっている野党になった時のことを見習うとしたら、なんとわれわれがなりふり構わずに、野党の第一義的役割として徹底的に戦うということをやって政権に戻ったわけです。いちやもんを含めて。ところが民主党が政権から落ちた時、皆が落胆してしまって、戦うどころか与党を経験した野党だからとか、私が大臣をやっていたときに決めたことだからとか、そんなことに引きずられてしまって中途半端に終わっていることが多い。向うに突かれたら、今は野党なんだからといって振り払うエネルギーが足りなかった。

岡田さんも、やはり与党を経験した野党だからというような、今でもまだ与党のふるまいをする時もあります。だから総括、自己改革というけれど、民進党はもっと闘う姿勢を出すべきだと私は思うのです。

柿崎 もう一つ加えると、枝野さんに言ったのですが、やらなくても良いから見せろと。自己改革をやっているように。もちろんできれば本気の方が良いですが。権力への執着ということと言うと、出口調査で、18歳、19歳で一番支持政党が高いのは自民党だった。なぜかという、別に自民党が支持されたわけではなくて、自民党が一番接触が多かった。ネット上で、茂木選対委員長が去年のシールズのやり方を徹底的に分析したのです。一番シールズから影響を受けたのは野党ではなくて自民党だった。そのやり方を規模が大きいから大々的にやった。自民党に対する不支持も同じくらいあるのですが、数値化されないから、数値化される支持が多く見えてしまう。民進党はそれを一番やらなければならなかったのです。進言した人もいたのですがやらなかった。そこはネットに対する感度が高いとか低いとかではなくて、権力に対する執着度合いの問題ではないか。それでは、ずっと野党のままという安易な道を選ぶことになりかねません。新55年体制がはじまりかねない。

中北 党内対立を避ける。党内の結束を乱さないという選択をしてきたことが、先ほどおっしゃられたような、小さいけれどもきちんとした核を作っていくということにつながらなかった。今回も維新を加え

て大きくしていった、内部の調整をどうやるかというところに意を配らなければならなくなっている。流れとしてはそういう形で来てしまっているという印象を持ちます。ただし、維新には意外と共産アレルギーがなかったですね。なくなっちゃいましたね、ある時点から。共産党と組むのはまかりならんと維新が言うのではないかと思っていたのですが。

山口 旧維新の初鹿などは割と早い時期から一緒にやろうとか言っていた。ある意味では政治の世界にそれほど長くいた人たちではないから、別に共産党についての変なイメージがないのでしょうかね。

先ほどの、松野さんが民主党抜きで野党協力というのははじめて聞いたのですが。それが岡田さんの背中を押したという面が強いのですか。

辻元 そうされるとどうなるかという、岡田おろしがはじまるわけです。維新との合流もなく、野党共闘も別のことになったのではないかと。参議院選挙に向けて、一度目の党大会はなんとか乗り切って、二回目は合流の臨時党大会になるわけだけれど、一回目の党大会の前にも岡田おろしが一部にあったわけです。顔を変えないともうできないと。それを何とか乗り切るために、一度目の党大会で、維新との合流を含めて「私は決断する、全責任は私にある」というスピーチを岡田さんはしました。合流もできず、他の野党に結束されてしまって民主党が孤立となると、やはり自分が失敗したというふうに思われるという危機感を覚えていたのではないかと思います。

山口 民主党時代の自己改革の話について、私の立場から見ると、海江田さんの頃に改革創生会議というのをやって、それらしいレポートは出したわけですが、やはり作文で終わってしまっている。負けても良いからちゃんと主要な地方選挙は自分の候補を出して戦うとか、そういう動きが全然繋がってこなかったし、あとはマインドセットです。みなさんおっしゃったように、本気になってもう一度政権をとりたいというような意欲が、外からは全然見えなかったですね。なんとなく現状に満足しているような感じがありました。それはたぶん野党協力への出足の遅さとも関係しているのでしょうかね。

中北 創生会議の報告書についていうと、一つの



中北 浩爾 氏

柱が女性の問題だったと思うのですが、では今回女性候補を積極的に立てたかということ、共産党等に比べると少ない。

辻元 目に見える改革は難しいのだけれど、たとえば執行部全員女性にする。代理に男がつく。こういうのはどうかという話があった。それから比例区を女性、男性、女性、男性と全部男女同数にして並べる。非拘束だからそれで勝って来れば良いわけだからという提案はしたわけです。3分の1は女性にするとかも。だけどなかなか実現は難しいです。

野党共闘について

中北 それでは野党共闘についてです。山口先生から、野党共闘の経緯。辻元先生からは野党共闘に民進党が加わっていったプロセスについてお願いします。

山口 昨年10月から3回にわたって、枝野さんの呼びかけで、安保法制に反対した5野党と、市民団体や学者やシールズで、これも5団体集まって、運動の総括と今後の進め方について意見交換をしましょうということになって会議がありました。私は10月は出られなかったのですが、11月、12月と立憲デモクラシーの会という立場で行きました。

そこで当然、参議院選挙に向けてどうするかということが話題になったわけですが、11月、12月は、特に一人区を中心に、野党が候補者を一本化して戦わないとどうしようもない。安保法制廃止あ

るいは安倍政権打倒という大きな目標に向けて、野党は候補者を絞り本気になっている姿勢を示してくれと市民側は要求しました。国会前で皆で一緒にやったことを今度は国政選挙でやるのだと言っていたのですが、やはり昨年秋冬の段階では、当時の民主党と共産党の間には埋めがたい溝がありました。

それぞれ党の事情があるから簡単にフルスペックの協力はできないという話になったわけです。12月の意見交換会が終わったすぐ後に、私と上智の中野君、学習院の佐藤さん、それからシールズの学生たちもいたと思うけれど、これは政党に任せていたのではちがいが明かないから、我々市民団体がテーブルをつくって、そこに野党に来てもらって協議をして協力するというような、他の仕掛けをつくった方が良いのではないかという話をしたのです。そうしたら、皆そうだそうだということで、割とそこは同じようなことをみな考えていたわけです。それで12月20日に市民連合の立ち上げ記者会見をしました。

以後、1月、2月は、特に一人区で野党候補、野党統一候補の擁立というので、いろいろなイベントをやりました。あと非公式に、民進党では枝野さん、福山さん、辻元さん。共産党だと私は主として小池さんと話をしながら、なんとか一本化しましょうよという話をしていた。熊本が非常に早い段階で野党統一という体制をつくっていたので、2月に熊本へ行行って市民連合として推薦しますということをやって、この形でやろうという外側からの世論喚起をしていった。

2月19日の野党党首会談がなんでこんな急に実現して、どつと野党結集の雰囲気が高まったのか私はよくわからなかったのだけれど、先ほどの話を聞いて、そういう裏があったのかと分かったような次第です。だから、全体として市民連合にどの程度の役割があったのかは正直言ってよくわからなくて、政治家というのは選挙が近づけば皆死にもの狂いになって動くもので、一人区で野党を一本化しなければならないというのは子供でも分かる理屈なので、それでは、やはり時間が迫ってくることによってなんとかあったのかなというのがあります。

あと一つ、我々にとって大きかったのは、北海道5区の補欠選挙です。あれも1月末まで地元北海道で民主党と共産党の間でああでもないこうでもないかとまもらなかったのですが、なんとか前の札幌市長の上田さんなどが奔走して池田まきさんに一本化という話になった。こういう形でいけるかなという期待を持ち出したのは2月半ばでしたかね。

中北 共産党が最終的に候補者をほとんど下すという形になりました。この理由についてはご存知ですか。

山口 それはやはり政党の地力からしても、共産党の公認候補は供託金没収くらいの票しかとれない。特に田舎の一人区ではね。そうするとやはり勝ち目のある候補、とりわけ民主党でいえば現職の一人区の議員、あるいは引退する人の後継者というのはいくらもいましたから、そういうところはやはり民主党の候補を皆で応援するのは当然ではないかと私は思っていましたし、そういうことは共産党の人にも言っていました。

辻元 志位さんがいきなり、安保の強行採決があった直後に国民連合政府と言ったときには危ういな、と思いました。こういうことは水面下ですり合わせた上で出さないとダメなわけです。小沢さんも政権交代の時に共産党が候補を立てない交渉を水面下でやったと思うのですが、慎重に進めていました。志位さんが割と強くおっしゃったのを見たときに、これはなるものもならないのではという危機感を持ちました。

水面下で野党がどうしようかという話をして、この辺だったらお互いに出せるねという文言調整、代表の発言の調整までできればもうちょっとスムーズにいった。自民党はその辺がうまくて、自社さ政権の第二次橋本政権の時に、この辺で社民党は怒って見せるから自民党はこの辺で降りろよということで、一応党内的にも格好がつく形にしつつ、着地点は水面下で調整しておくということを自分自身でもやってきたので、やはりこういう難しい協力体制をつくるという時には、そういうことがしたたかな戦略として必要だったのではないかと思います。

表に出たときは、もう「ト書き」までできていないと

うまくいかない。表に出てから演技をしてはダメで、全部ストーリーが出来ていて、表に出てくるときには最後まで物語が書けていないと。そこがなかったのでぎくしゃくしてしまった。だからそれでもよく何とかこぎつけたなと思います。

中北 ぎくしゃくした後は内部でいろいろな調整をしながら最終的にそれぞれ選挙区ごとに決めていくという作業があったわけですか。

辻元 内部というか執行部とかを中心に。東京で決めてもそれぞれの地元の事情がある。市議会議員や県議会議員は戦っているとか、労働組合同士もいろいろお互いにいままでの因縁があったりとかするので、それぞれの選挙区にあわせた形の調整をかけないとできないわけです。しかし、運動サイドからは突き上げられるわけです。なんでできないのかと。もうちょっと待ってというのが通用せず、かなり批判を浴びせられるのがつらかったです。

中北 なるほど、最終的には中央もそれなりに関与しながら地方ごとに調整して候補者調整を進めたということですね。それについて民進党の中で相当な反対があったのですか。

辻元 反対している人はいつも決まっているわけです。ところがその「反対グループ」のメンバーも最後は共産党と一緒に演説していました。共闘でなければ一人区は通らないということをそれぞれ肌身に感じるようになって、そこからはみな黙りました。

だから、今後どうなるかわからないけれど、衆議院も、憲法改正だけじゃなくて歴史認識も安倍さんっぽいと思うような人も、僕みたいなのも共産党が立てないでいてくれるなんてあるかなとか、そういうのはどこに話をすれば良いのかななんて聞きに来るんです。惜敗率の勝負になったときに響いてくるわけですから。

柿崎 新聞でよく保守系議員が反対というけれど、あつという間に許容しました。これが大問題で、そこらへんは有権者はわかるわけです。票欲しさに何でもというのが見えてしまって。

先ほどの話でいうと、去年の9月に国民連合政府の話が出ました。あれを私が何で知ったかという、政権の中枢中の中枢の人から電話がかかって

きて、民主党と共産党が組むらしいぞと言う。ええ、嘘でしょうと言ったら、いや時事通信社は打っている。大喜びです。やったと。これが全てです。

では共産党はなぜああやったかという、たぶん二つ理由があって、安保法制反対が盛り上がったのでいけるのではないかと考えた。もう一つは経済的な事情。だけどただ下すだけでは党内統制的に難しい。なぜやらないのだといわれる。下すにあたって、要はカードを高く売ったわけです。やはり一時間でもいいから民主党が先にいうべきで、それだけでも全然違っていたのだけれど、順番が逆になっていた。

そのあとを見ていると、段取りをしないでものごとをやってしまうという癖です。共産党だけではなくて民進党にもある。このやり方自体が政権運営から脱落させた大きな原因です。前原さんと辻元さんがすごくうまくやっていたでしょう、国交省の大臣と副大臣で。多くの人は違いました。暗黙知を共有できないところが大きかった。政権運営も野党共闘も同じです。何も決まっていなくて言うだけ言って座礁する。

辻元 だから菅政権のとき、消費税もそうだけれども何でも、要するに、幕が上がって、筋書きが決まっていなくて役者が並んで、さあ今から芝居しましょうとやっているようなものです。今国交省の話があったけれど、たとえばJALの再生とか国労の首切りされた人たちとの和解とか、ものすごく水面下でやったのです。それもどのタイミングで誰が何を話すとか、そういうのを綿密に調整していかないとできないわけです。

山口 市民運動の方は割とナイーブな人が多い。国民連合政府との構想に答えてフルスペックの野党共闘みたいに言う人が大勢いる。共産党というのは一応名前だけエントリーしているところが多いので、別にそういうのに降りてもらうのは当たり前ではないかと私は思っていました。市民連合の中では、私はやはり民主党寄り人間で、野党共闘の原則論を追求する人たちとの間でもいろいろ苦労しました。

中北 確かに安保法制反対という一点からすれ

ば、共産党の方が主張も明快だし、そういう点では民主党、民進党寄りではなかった。

山口 やはり運動との親和性は共産党の方が高いでしょう。

辻元 実際に私は、途中で、当時小池晃さんはまだ幹事長ではなかったけれども、北海道の一本化をどうするか、水面下で二人でやっていたわけです。その時、私はすごく左の色が強い方だと思うけれども、小選挙区で勝とうと思ったらいかに保守の票を取りに行くかでなければ勝てない。私の選挙区では、選挙区で6万票いただいたとしても、比例区で民主党と書く票は2万数千しかないわけです。比例区で自民党と書いても選挙区で辻元と書いていただく票を一定数とって勝ってきているわけです。だから共産党が目立つと勝てない可能性も高いのです。本当に安倍政権を止めたいならば、いかにあなたたちが目立たないかを考えてもらわないとダメなのだというところを、かなり強く小池さんには言っていました。

中北 その話はものすごく重要です。柿崎さんが最初におっしゃられたように、保守票もとらないといけなし、共産党ともある程度組まないといけない。両方やらないと勝てないのが野党の状況だと思うのです。

柿崎 2009年の方式しかないですね。

辻元 そうです。そこはかとなく阿吽の呼吸ですみわけをする。

柿崎 だからテーブルの上で交渉してしまった人はもう無理なのです。今から水面下というのは無理。やっているだろうといわれる。

辻元 これからは非常に難しいですよ、これからどうしていくか。

山口 市民連合がどれくらい成果をあげたのか私にはわかりませんが、市民連合とは別に各地で、今までにない経験ですが、いろいろな市民団体が選挙に関わっていったというのはとても大きな変化です。それはかなり勝利に貢献した県もあります。新潟などはその典型です。

辻元 東京もそうでしょう。最後に民進党の二人目が通ったのはシールズが頑張ったことも大きい。

山口 あれは頑張ってくれたね。もう一つ、やはり地方の大学の先生たちが結構動いた。地域の政治運動の中心に来たのは、地方の大学の先生たちです。これは学者の業界の話だけれど、地方大学は今本当に抑圧されて、特に人文社会系は無くされようとしていますから、最後の反発でいろいろな大学の先生たちが立ち上がった。これは選挙とは別に、学者としては非常にうれしかったです。

辻元 でも私たちは、山口さんの存在がそこはかとなく精神安定剤だったわけです。本当に学者の人は、必死であればあるほど政治の論理とはかみ合わなくなる人が多い。なんでこんなはつきりしたことができないのだと言って責めまくる。私はリベラル系の研究者の方々にも立候補してと言ったことがある。野党を一本化できる候補者を探してきてやれば良いのだ、一本化できる候補者も見つけれないのかということから、あなた出てよ、と。私は市民運動出身で、私は出た。それで国会の中でNGOとか市民運動が大事だという活動をしている。なぜ国会前でマイクを握って発言してきた人が一人も出ずに早く候補者を探せと責めるんだ、と言ったことがあるのです。

でも、ご自身も悩まれたことがあったのだけれど、山口さんはそこをよくわかってくださっています。市民団体とか今回はじめて政治にかかわった人はプラスの面もあるのだけれど、遠慮なくこちらも政治の本音でしゃべらないと、周りで太鼓をたたいているだけなのか、一歩踏み込むのか、本当にやる覚悟があるのかを言わないとダメだと思っていました。

山口 候補が一本化できたあとの市民の動きは、それはやはり私は非常に高く評価できると思うのです。特に新潟、宮城、長野。三重もそうだ。最初は民進党も共産党も一度引っ込んだうえで更地から何かをつくろうという夢みたいなことを言う人もいたのだけれど、そういうのはあり得ない。だから3月、4月くらいで候補を一本化したら、あとはそれでいくしかないということになりました。そこからあとの市民の動きは、これは大変な貢献です。三重などはシールズ東海の若者が、芝さんと一緒に動いて、芝さんもすっかり市民派政治家みたいになった。そうやって

化学変化が起きたと思いますよ、いくつかの県で。それは良い経験だったと思うな。

中北 さらに一人区の調整だけでなく、複数区の当落線上の野党候補のテコ入れをしていくのが最終局面ですね。

山口 東京、神奈川、埼玉、愛知あたりは民進、共産の両方を各県の事情に応じて応援しました。そこらへん複数区への対応は難しいですよ。政党の論理でやるしかない。

柿崎 それでいうと、学ばなければならないのは、やはり与党側の応援団の日本会議という組織です。市民運動ではなく草の根運動なのでしょうが、非常に巧妙です。もともと生長の家とか生学連の経験者がやっているのノウハウが蓄積されている。つまり右派の運動をやっていた人たちが中心なので、やりたいことと現実的にやらせることを切り分けて応援もするし、宗教団体を取り込んで自分たちを大きく見せるとか、徹底的にメディアに文句をつけて、報道させたいように報道させるというようなところを、とことんやっているわけです。今その影響力がより強くなっています。だからあれを批判するのは良いのですが、あそこに学ばなければならないところはあります。

あともう一つ、連合の動きが非常に気になっています。神津さんの体制になって間もない段階で、神津さんが言っていることがことごとく覆されている。共産党と組まないでくれといったら組むし、名前を変えないでくれといったら名前を変える。だから神津さんがきついのです。

いま何が起きているかという、これは2014年すでに起きていたことですが、ある県の1区、企業の工場に自民党の人を入れたのです。それまでは敷地内に入れなかった。自民党は別に応援しないが、抵抗もしない。いままでは抵抗もしていました。さらに最近、人物本位方式という毎回出てくるパターン、これが頭をもたげてきています。共産党との関係でもう一つの懸念材料は連合の問題です。

辻元 その裏返しみたいなことが東北で起こったわけです。東北の農業団体は人物本位ということで、いままで自民党しかやってこなかったところが、

舟山さんに代表されるように、ものすごく受け入れられていったということ。

山口 東北、甲信越でなぜ勝ったかという、そもそも民主党をつくった時から、鹿野先生にしたって小沢さんにしたって自民党を割ってきて民主党をつくったところだから、やはり保守票はかなり取り込んでいるところですよ。それはやはり西の方と違うでしょう。

辻元 アメリカでトランプに熱狂したり、イギリスのEU離脱とか、いままでと違う物差しの人々の雪崩を打った動きが出てきています。安倍政権に対するなびき方とか、日本会議の動き方とか、草の根保守みたいなもの。経済のグローバル化が進んで、いままでのような一国単位のお金や情報の流れではなくなってきて、格差の問題といっても、国内より世界中を覆っている大きな格差が生まれてきている。それによってヨーロッパとイスラム諸国を中心にテロが誘発されているという恐怖心や、中国が一定の経済力を持って軍事的にも台頭してきているとか、そういういろいろな現象が起こっている中で、昔のように、平和でいきましょうとか日中友好していれば良いというような言葉は伝わらなくなってしまっている。

アメリカ大統領選挙はヒラリーが勝つのではないかと思うのだけれど、トランプとかサンダースの方が言葉のエッジが立って、ヒラリーの言っていることは岡田さんが言っていることと似ているなという感じがする。ヨーロッパでも、スペインのポデモスとか、マリーヌ・ルペンというその反対側が出てきたり、オランダは、昔でいえば社会民主主義者でフランス社会党のホープだったけれど、言っていることなどはどちらつかずで何かわからない。メルケルですら今やそうでしょう。

次の世界的な流れを踏まえつつ、政治の新しい軸とか届く言葉、理念、新しいステージを構築していく土台をどこに持てば良いのだろうかという浮遊している感じが、特にリベラルと言われた側にあるのではないか。私自身も、どういうところに受け皿を持って来れば良いのか悩んでいます。

民進党の政策についての評価

中北 今後の野党共闘については最後のところで戻ってくるとして、この流れで政策の方に移りたいと思います。

今回、民進党が掲げた政策は、たとえば格差の是正だとか人々の心にリーチする力を持っていたのかどうかはなかなか難しいところではないかと思えます。先ほど山口先生からも安保法制のエネルギーを生かせないままで選挙戦になってしまったというお話がありました。この点についてはいかがでしょうか。その前提として、長妻さんが担当されていた共生社会創造本部、そういうところで作った政策を参院選の公約にしていたのでしょうか。どういった形でキャッチフレーズなり政策なりを打ち出したのか、その経緯から。

辻元 長妻さんがやってきたところを基礎にしてつくっていったわけです。安保法制の一連の流れから、憲法問題を両輪にしようということでした。党の中に企画会議というものがあります。政調会長等が入ってそこで決めていくものです。ただ、やはりエッジが立っていないわけです。たとえば政調の部門会議というものが毎週火曜日にあるわけだけれど、そこで前原さんが、「私たちは高校まで授業料の無償化を実現した。これを大学まで無償化を目指す。高校まで無償化しているから、大学までの無償化はあと2.9兆円あればできる。これは消費税1パーセント分ですから、消費税1パーセント分をそれに当てましょう」というような、エッジの立った政策を出さよと言ったのです。私も同じようなことを考えていたから、それは良いと思って、党内であれやろう、良いじゃないと言ったら、いやピンとこないなという声が強かった。また子ども手当と同じになるのではないのかというわけ。そういう恐怖心がある。

山口 結局、先ほどの党改革のところに戻るけれども、やはり何を指すかというところで、座標軸をちゃんとつくれていないからエッジも立たないのです。本来であれば消費税率先送りという方が言ったら、こっちは、いや予定通りやったうえで大学を無

料にとか、子ども手当を復活とか、とにかく集めた金を全部使うからというところでぶつかっていくべきでした。これは理想論ですがね。政策論としてはやはりそういうチャレンジをすべきところですよ。

中北 消費増税の延期については党内でどういう議論があったのですか。

辻元 もう延期の大合唱でした。岡田さんは、野田さんもそうだけれど、延期は最後までやりたくなかったようなのです。けれどもそれは突き上げられた。それと消費が低迷しているという数字が出て、やはり今上げたら経済がもたないねということであるタイミングということ。前日の午後、私と岡田さんと党のスタッフと、岡田さんの政策秘書の4人で、明日が限界だからどういう言いぶりが良いかとか検討したけど、岡田さんは、決めたら迷いを持たずにバンと言わなければだめだと。前日までどうしようかなと言っていた。

山口 まあ、野党共闘でいえば消費税の問題は先送りしかなかった。それはないものねだり、理想論ではあるのですが、逆にいうと、本気で安倍政権を倒しに行く、自民党を倒しにいくならば、そこは野党共闘でも乗り越えていかなければ。

中北 その局面ではですね。今回エッジが立たなかったいくつかの理由があつて、かつてのような目玉政策がまずなかった。2009年の政権交代の際には、高速道路無料化、子ども手当、農業の戸別所得補償、高校無償化といった目玉政策を提示したわけです。盛りだくさんすぎましたが。

辻元 人への投資とかいって。だから私は、大学まで無料でいける国を目指すというのと、中小企業支援で、中小企業の社会保障負担を半減しますというのと、それから年金のGPIFに入れるのを元に戻すとか、あといくつか、5つくらい、こういう具体的なことを言おうよとだいぶ主張したのだけれども、ダメでした。

中北 今回は項目はあつたけれども、中項目くらいがだらだら並ぶような選挙公約になってしまいました。あともう一つ、財源問題がネックとなってパンチがない。いろいろな意味でエッジが立っていない公約になりました。

柿崎 政権をとる前の民主党は具体的な像を描いて政策をつくっていましたね。40代男性で子持ちみたいな。今そういう話をする人がいなくなりました。似たものを感じる政党があるのです、維新です。維新は二大政党化を目指している。自民党以外のところを取りに行こうと。その中で生き残っている辻元さんに答えがあると思うのですが、枠組み論に行き過ぎてしまったりして、そちらに頭が回らなくなっている。それから、どこかにフォーカスを当てるといって主体性が必要ですが、自信を喪失したことによって主体性も喪失してしまっている感じです。やはり、主体性を取り戻して、どこの誰のために何をやるかということを組み立てれば、おのずとエッジはかかってきますよね。大阪維新がそれをやっているわけですから。エッジを立てようという目標を立てたとしてもエッジは立たない。

辻元 実際に私たちがやらなければならないことは、次の衆議院選挙までに退潮してきた今までの流れに歯止めをかけて逆に戻す。そのためには、共産党とどうするかとか技術的なことから、何を主張するかということとを2年以内くらいは対応しつつ、私がすごく懸念を持っているのはオリンピック後の日本がどうなっているかということなのです。オリンピックくらいまでは引っ張っていけると思うのです。そのあとに、高齢化社会を、消費税を含めてどういう負担をしてどう社会の底割れを防いでいくかということ、中長期的なビジョンを描かなければならない。ポストオリンピックの時代を見据えたときにやらなければならないのは、それこそ人への投資なのだけれど、子どもたちが学べる機会をしっかりとするというの一番のポイントだと思っています。だから、そういう逆算していくようなビジョンを民進党で出していく。それと共産党との関係。私も09年方式が、阿吽の呼吸ですみわけするというのが良いと思うのだけれど、その両方をやらなければならないのではないかと思います。

中北 そうですね、マニフェストで、4年間の数字を積み上げるのではなくて、中長期的なビジョンで何をやらなければならないのか。今はどちらかというとなりマニフェストがなくなってしまうと、短期的な判断に

傾いてしまっている。今回の消費増税延期も、そのあらわれだと思います。特に「社会保障と税の一体改革」をどうしていくのか。もうほとんど棚上げ状態になっていますが、これをどうしっかりしたものを作り直していくのか。

辻元 一体改革のプランを三党合意の枠組でつくったものの、その後、民主党政権が崩壊してしまいました。あれは、霞が関を含めて危機感を持っている人は総力を費やして議論してつくっていったと思うのです、この日本の危機を救うために。それがぐしゃぐしゃになってしまっている。しかしあの一体改革だけではもう済まなくなってきた要因も出てきているでしょう。それをどうしていくか。私は民進党を中心に、自民党の中でぶつぶつ言っている人もいますので、そういう人も含めて、霞が関も含めて勉強会をして、きちんとしたビジョンを作り上げていく。立法府の立場として責任を感じるので、やっていけたら良いなと思っています。

柿崎 大阪維新が一体改革攻撃をはじめてますね。破たんしているのではないかと。それをチームでやるようです。

憲法改正問題

中北 一体改革も重要ですが、憲法改正の方が今回は大きい争点でした。山口先生はこの訴えかけが効かなかったという認識ですが、3分の2をとられたといっても、改憲勢力は多様なので、今直ちにフルスペックの憲法改正ができるわけではない。そういった意味では冷静になって良いと思います。今後憲法改正の方に安倍政権が向かっていくというなかで、今回なぜこの問題は国民の関心を集めなかったのか。「安倍政権による憲法改正に反対」という立て方は正しかったのか、言い方を含めて良かったのか。この辺りについてはどうでしょうか。

山口 ちょっと私も錯覚したところがあつて、今年の憲法記念日に各紙に出た世論調査を見て、安倍政権の下で憲法改正反対論が非常に大きくなって

いるということで、これを争点にしてやればある程度反安倍みたいなムードをつくれるかなと甘い予想をしました、5月前半くらい。だけどやはり国政選挙は憲法問題で戦うのではないなというのは感じました。やはり、格差や貧困というけれども、投票に行った54パーセントの国民の中の多数派はまだ大丈夫なんだね。そんなに自分の問題として安倍政権のおかしな政策の被害者という自覚がないのでしょうし、憲法もやはり安保法制というのが単体で出てきて、国会で安倍政権がかなりむちゃくちゃなことをすれば、それはおかしいという反応をする人たちもいたけれども、それが選挙の際の判断基準には結びつかないのだなというのを、今回選挙戦を戦ってみて感じました。前から世論調査で個別の政策について問われれば、原発再稼働も反対だしアベノミクスも恩恵を感じていないというけれど、やはり自民党に入れてしまうという有権者が多数派なわけで、その趨勢は変わっていない。

辻元 今回、憲法に危機感を感じている人は一定数いるわけです。減ってきているとはいえ。そこは取り切ったうえで伸ばしていこうという戦略だったのが、「まず3分の2は取らせないこと」ということで、そこを固めたうえで次にと考えていましたが、次のメッセージがなかなか届かなかったのかなと思います。

柿崎 土台は土台としてそれなりに機能していたと。

辻元 土台は土台として、やはり危機感を持っている人は今回選挙に行ってもらえたのではないかと思います。そこにプラスするところが弱かったと思います。

柿崎 個別具体の改正項目がなかったのが、伝わらないですね。憲法改正が良いのか悪いのかといっても漠然としすぎていた。ただ、ここからは民進党は防御的に考えておかなければならないことがあります。私は2018年後半に衆院選と国民投票のダブルがあり得ると思っています。それをやられたとき、今の民進党は何もやっていなければ壊れます。まず民共ができなくなる。そして民進党の中もたぶん割れます。

中北 つまり穏健な内容の憲法改正案ができたときですね。

柿崎 3分の2をどう構築していくかが政治の技術というのは、イコール公明党許容案でやるということなのです。公明党案ということは、たぶん民進党の中はもっとすごい人がいるわけだから、割れる。国政選挙で憲法を争点とすべきだと言ったのが逆手に取られます。国民投票を同時にやると極端に言えば勝ち負けは決まっています。国会で3分の2を取った人たちがやるわけだから、それが衆院選と被るとなると最初から3分の2対3分の1になる。あぐくのはてには3分の1がさらに割れる。最大の危機はその時にやってくるのではないですか。

辻元 結局こんな不毛な議論をやっているのは日本だけなのです。憲法改正した方が良いですか、するのは悪いですかみたいな議論をしているのは。この議論がなかったら、もっと中身のいろいろな政策の話ができるけれども、ここで対立みたいなものができてしまっている。安倍さんは、何でも良いから自分の時代に憲法改正をしたという実績を残したいのではないかと思うのです。この間の戦後70年の談話にしても慰安婦の妥協にしても、何かやったというのを残したい。公明党もいるからそれほど大それたことはできないわけです。

山口 まあ9条は無理でしょうね、公明党がいる限り。

中北 そうすると民進党は穏健な内容の改憲案であれば、賛成するということですか、安倍さんが出して来たら。

辻元 内容しだいです。どうしても必要なところがあれば、変えればいいけど、今は見当たらない。

中北 安倍政権での改憲には反対という立場はとらないということですか。

辻元 岡田さんが言っていることには理があって、自民党の憲法改正草案は、あれこそ憲法とは言えない代物。それから現行憲法を代物扱いしてさげすんでいるという安倍政権の姿勢は訂正するというか、ちゃんとその間違いを認めろと言っているところは正しいと思います。その入り口のところはやらないと、そのあとは進まないと思うのです。岡田さんはそ

こを踏ん張っているわけです。民進党のためというよりは、戦後の歴史、戦前の歴史を含めて、日本の成り立ちを否定するような安倍さんの認識は改めてもらわなければ困るというのを、一人の政治家として言っていると思う。

中北 さすがに、その点では民進党の中は統一しているのではないのですか。民進党の綱領は日本国憲法を肯定的に評価していて、それを前提に参加しているのですから。

辻元 それはどうかわからない、現実的に。

中北 今回の代表選挙の一つの争点ですね。

辻元 やっと旧民主党の中の意識が統一されてきたのは、昔は自民党のような憲法改正草案をつくらないと、遅れているというか政党として責任がないと感じてしまう「病」にかかっていた人たちが多かったわけだけれど、議論を深めるにつれて、「そうではない、どうしてもだめなところがあれば変えれば良いのであって、昔憲法構想などというのをを出していましたが、あれは引き継がない」ということまでは意識は一致してきています。

山口 やはり私も岡田さんは立憲主義者だと思うのです。だから、自民党がつくった憲法改正案をベースに議論をするというのは絶対に認められないというのは、私は正しい態度だと思います。ただ、立憲主義で闘っていくことの限界のようなものを感じるわけです。これは最後の野党協力の今後という話につながるのですが、今の共産党を含めた野党共闘は、3分の1という峰を登るための共闘です。その峰の先には何もありません。この3分の1という峰を登り切ってしまったら、あとは何もありません。2分の1という上を目指して野党協力をするのであったら、3分の1の峰を一度降りて、別の道を進んでいかなければならないわけです。3分の1の先に2分の1がないというのが今の日本の非常に困ったところなんです。3分の1を死守するのは立憲主義で、2分の1を取るの民主主義ですね。2分の1の道を目指す道がまことに曲がりくねってよくわからない道なのですよね。

中北 安倍さんがいるうちは3分の1の峰から降りられないでしょう。

山口 そういう問題もある。だけど、安倍が引っ込んで自民党が穏健になったら、それはそれで新55年体制で良いかという気分も立憲主義者、護憲派の中には結構あるのです。我々は憲法改正を阻止する役割で、実際の統治は自民党さんよろしくという感じ。これがやはり戦後の立憲主義の発想なのです。その辺は、今回の安保法制反対運動から市民連合に至る運動の中で、そういう人たちもなだめすかして取り込みながら、そうは言っても政権交代のあるデモクラシーこそ王道だという理念は捨てたくないと思います。とりあえず一緒に暫定的な共闘をつくってきたけれど、これで本当にやれるのかというのは最近正直言ってよくわからないのです。

辻元 山口さんにアメリカのことなどいろいろ聞きたいのだけれど、トランプというのは、石原慎太郎氏と橋下徹氏を足して2で割ったような…

中北 昔の日本維新の会ですね。

辻元 ですよ。そういう感じがするという指摘があります。でも安倍さんも保守の亜流でしょう。彼の周りを含めて。では、アメリカの共和党の本当の王道の保守とヒラリーたちの民主は差異化が難しくなってきたのではないですか。

山口 王道の共和党というのがいなくなってきたのです。ブッシュの時代にネオコンと宗教原理主義に乗っ取られてしまって、且つ、ティーパーティーのようなある種原理主義的小さな政府論者等もそこに加わって。穏健保守みたいなものはアメリカでもなかなかいない。

辻元 なぜそれを聞いたかということ、日本の自民党もそうなりつつあるのかということなわけです。宏池会みたいなのが。

山口 私は自民党の中の様子はよくわかりませんが、やはり今の選挙制度で、自民党政治家も世代交代が進んでいって、衆議院議員の4割が当選1、2回生でしょう。風に乗って当選した経験しかない連中で、あまり実社会で何か経験をしたとか、自分で本を読んで勉強したとか、あるいは政調の部会でいろいろなことを勉強するシステムとか、そういう政治家を育てる仕組みがない現状では、私は自民党の中の穏健保守というものは非常に希薄なのでは

ないかという気がするのですが、どうでしょうか。

柿崎 谷垣さんが幹事長で、岸田さんが外務大臣、中谷さんが防衛大臣、麻生さんが財務大臣・副総理ですから、安倍政権は宏池会政権なのです。ザッツオールです。だからもう無いでしょう。なぜそうなっているかという、たぶん宏池会というのはいわゆる神輿でした。実働部隊は経世会だった。完全な経済集団です。既得権の代表の集まりみたいな。ある意味ノンポリ集団。これがなくなりました。だから宏池会もこうなりました。これが再構築されることはもうないので、そこを二大政党制であれば、民進党が取りに行くべきなのです。でも今の上り方では絶対にそこにはいかない。

また面倒なのは、次が岸田さんになったりして、出自は宏池会で、言っていることもソフトな感じなので、宏池会政権ができたぞということになっておさまると、これまた新55年体制です。宏池会で落ち着きましたねとなると。

辻元 しかし実際神輿を担いでいる実働部隊は日本会議だったりする。

柿崎 そう。それで何かがあると急に集団的自衛権を発動してしまったりして。岸田さんは自分が責任者ですからね。安倍政治は実はシンプルでしょう。言っていることは同じなので。谷垣総裁の時につくったのが今の憲法改正案です。安倍政権を思いっきり支えているのは宏池会ですから、宏池会の功というか罪が一番大きいのです。今の自民党が異常というのであれば。

辻元 一方がそのようになった時に、アメリカなどでも民主党をどうしていくかということがあるわけだけれど、私たちもどういう立ち位置を持つていくかということなわけです。宏池会的な立ち位置だとなかなか選挙には勝てないのです。だからサンダースではありませんが、そちらにぶれる引力が働いてしまって、どの辺に立ち位置を持つていくかということで苦慮している。それは民進党の内部改革だけでなく、政治の地殻変動の中で、かつての宏池会的なりべラル保守の立ち位置が自民党の中でも壊れたように、社会の中に生き残る余地があるのかどうかということになるわけだと私は思っている。だから、一

方でトランプみたいな集団として維新等が出てきている。これからの方向性を指し示すことが、正直なところ難しい。踊り場で次の階段をどう登れば良いかというので足踏みをしている感じです。

中北 確かに今回の参院選を通して顕在化したのは、民共対自公。批判もあったけれど、実態としては民共が手を組んだ、さらに野党共闘が出来たから、自公もますます固まるという図式だったと思うのです。こうした二極化は不可避のプロセスであったと思う反面、これで日本の政治は良いのか疑問を持っています。「社会保障と税の一体改革」が先送りされたことをはじめ、いろいろな問題が起きているわけですから。

山口 それは立憲主義だけを追求していてもデモクラシーがうまくいかないわけで、2分の1を目指して支持層を広げ政策を立て直す努力をしなければなりません。このままいくと、立憲主義プラス新55年体制というような話がむしろ野党側に広がっていくのではないかという感じがあるね。

民進党代表選

中北 そういう中で、次の代表選挙は。

辻元 代表は誰が良いと思いますか。

柿崎 私は岡田さん以外。

山口 思い切って世代交代だよ、私は岡田さんの努力は多とするけど、次は玉木でも山尾でも良い。

辻元 前原さんはどうですか。

柿崎 良いと思います。

山口 良いじゃない、前原は最近小沢とも親しいから、ある程度歯止めになる。岡田さんについては、本当に去年安保法制の対応から参院選の野党結集について、ある意味での確かな判断をしてくれたというのは個人的にはすごく感謝しています。だけど、これはこれで一つのステージが終わったという感じなのです、この参議院選挙で。

辻元 蓮舫さんは？

柿崎 私はオーケーです。

辻元 蓮舫さんと前原さんだったらどちらが良いと

思いますか。

山口 蓮舫ですね。女性でいくべきだ。

中北 女性じゃないとダメですね。土井社会党と同じだと思います。

辻元 蓮舫さんだったら支持率上がるかな。幹事長は誰が良い。難しくないですか。

柿崎 野田さんで良いのでは。

中北 野田幹事長ですか…。

柿崎 誰もあり得ないと思っているものが良いでしょう。辻元さんは、蓮舫さんがやるといったらやりますか。

辻元 全員出揃ってからの判断ですね。

柿崎 枝野さんもやっと少しやる気になり始めました。今回ではありませんが。

中北 党首を含めて民進党自体に輝きがない。野党共闘、そして維新と一緒にになったということで、大きくはなったけれども、なかなかコアが見えないという先ほどからの話があって、そこを作り直すのが今度の代表選の意義ではないでしょうか。

辻元 だから、起承転結の転が必要です。

山口 思い切って世代交代でリーダーシップを刷新したうえで、もう一度政権構想をつくり直すという作業をして、そのうえで野党結集で一緒に戦った人たちにもう一度ゼロベースで議論を仕掛けていって、これでやれるならば政権まで一緒に目指しているという話になるし、それについてこれないというのならば、やはりもう一度やり直す。公明党を引きはがすとか、自民党の中でのある種の再編を視野に入れるとか、全然違うシナリオも書かなければならないでしょうね。私は正直言って共産党にもすごく感謝しているのだけれど、これで政権交代までいけるという感じはしないのです。

柿崎 共産党が変わるということは絶対にないですか。

山口 ないです。

中北 今のところその兆候はないですが、総選挙やその先にある政権交代に向けて、野党が抱えるジレンマを解消する最大の方法は、共産党が変わってくれることです。

山口 ここまでやって、共産党はほとんど得るもの

がなかったわけでしょう。そうすると、党員、活動家の中には相当不満がたまっているのではないのでしょうか。

辻元 共産党の生きる道というのは、私たちが批判されたあのポスターかなと思うのです。あれが共産党で、共産党は嫌いでも民主主義を守りたい、そんなあなたへというね。共産党が変わるということも一つ。ここでは岡田さんしかできなかったと思うのです。あの人はずっと考えて、考え抜いて、何をたまたまして私などはいらいらしていたりするのですが、考え抜いてこれだと思ったら絶対にぶれずに突き進んで行くわけです。どんな批判を浴びても。だから、そういう意味ではここまでは本当に、なるほどこれが岡田克也なのかなと思いながら一緒に仕事をしてきました。

山口 それはもう、大したリーダーシップですよ。

まとめ

中北 時間がなくなりましたので、最後に一言ずつ締めのご発言をいただきたいと思います。柿崎さんから戻るような順番で。

柿崎 私は狭き門より入ってほしいです。苦しくても、民共関係を、もう一度自分で俎上に載せて、世の中の批判を浴びて、やり直す。その結果ダメということになったらダメでもいいし。そこで一度へこむかもしれませんが、その上で、それも甘んじて受けてやった方が良くと思います。つまり目の前の状況に過剰対応していくと、結局縮小していくことになりかねません。

あともう一つは、このままいくと維新が憲法改正で超与党化するなかで公明党と自民党の一部とぶつかり合うでしょう。すごいエネルギーが生まれます。そうなれば、ほとんどそちらにメディアがジャックされてしまって、しばらく続くことになるでしょう。だから次の展開が、野党に関係なく、与党の中での抗争になってくる可能性がある。そうなった時に耐えるには、やはり現状を伸ばすことだけを考えるのではなくて、いったんここで、同じ体制を組むにしても

一度総括しないと。かつて民主集中制という指導原理とは組まないと言ったような議論をすべきだと思います。

山口 まあ、野党結集の旗を振ってきた人間なのだけれど、やはり野党結集の限界というものは見えてきています。3分の1という峰を目指してともかく頑張る。新55年体制を目指すのか、それともやはり政権交代のある政党政治を目指すのか。今やはりそれを議論して考える時だと思います。

政権交代を目指すのであれば、政権構想の柱をきちんと自分で書いて、野党とこれで一緒にどうかと。やはり民進党が能動的に野党再編と政権構想の議論を仕掛けていかないと。ともかく次の選挙でもう一度協力しましょう、3分の1を目指しましょうというのでは3分の1も取れないと思います。

辻元 私はもう、とことん絶望しまくろうと。やはり絶望から目を背けると希望は生まれないと思うの

で、とにかく絶望ととことん付き合っ、そこからどう力を蓄えていくかということをしていきたい。私は一度辞職もしているわけです。留置所も入ってきた。何度も絶望の局面が個人的にもあったのです。二度と立ち上がれないと思ったこともあったけれど、政治的には今の絶望度が一番強いですね。アメリカの現象とか、世界的にテロがこれだけあって、障がい者施設に若い人が入って行って19人も殺戮するとか、この世の中にどう向き合うかというそういう絶望。単に民進党を再生しようとかいうよりも、政治の役割は何なのだろうとか、この中で政治はどういう役割で皆が共存していける日本、世界をつくっていけるのかという絶望から、こうしたいという解を見つけていく。単に民進党というのではなくて、その絶望から希望を生み出せるかどうか。

中北 長い時間、どうもありがとうございました。■

